

虚無からの創造

——原理論の変革——

川田熊太郎

一 緒 語

ヨーロッパ哲学の研究に多くの困難が、準備学の見地からして既に、伴っていることは勿論であるが、此の哲学の思想内容そのものが、我々には、多くの困難を差出している。これらの諸困難は根柢の諸困難から出て来てゐる。今此処で考究せられるのは、その根柢の諸困難の一つである。そしてそれは「虚無からの創造」*creatio ex nihilo*である。この思想は、早くからキリスト教のうちで養育せられた人々には自明の真理であらうが、異なる思想の伝統のうちにて成長した人々には了解に全く困難なものである。そのみならず、大正時代からは此の思想が哲学を通じて仏教、殊に、禅宗の内へ取り入れられて混乱を起して益々不可解なるものと成る。そして道元禅師は正法眼蔵によりて虚無からの創造を説きつ

づけたのであったとまで言はれるに至っている。此処には諸思想の警戒すべき混乱がある。此の混乱を整頓するがためにキリスト教の神学及び哲学における此の思想の正統説 *orthodoxia* が明確とならしめられなければならぬ。そしてそれはヨーロッパ哲学の原理論の変革という、我々によりては看過せられがちの、問題につらなるのである。今此処ではその明確化を努力の主要目的とする。

二 問題の处在

カントの形相主義はプラトンのそれと密接なる関係にあり、此の二者を結ぶ線の上に現われる諸哲学のみが眞の哲学であると言われる。かく言ふ人々は確かに理由を持っている、というのは、カントがイデーを説くに際してはプラトンと自己とを連結しているのであるから。しかし此の二者

を比較考究するに、此の連結は必ずしも成功していない、というのは、其処には明白ならぬものが含まれているから。カントは言ふ、プラトンの説によれば、諸イデーは最高の理性から流出し、そこ(最高の理性)から人間理性へ与へられた、云云、と。しかしプラトンの現存する著作からは、これが彼の説いたものなりとは知られないのである。またカントによれば、人間は創造の終局目的であるが、プラトンには此の創造なるものが知られてはいないのである。また此のプラトン・カント線に対してアリストテレス・ヘーゲル線が言はれる。そして之を言ふ人々(マールブルガー)は此の第二の線上に現はれる人々を哲学者としては価値の極めて低きものとする。しかしアリストテレスやヘーゲルの哲学は、ヨーロッパ哲学にとつては、依然として大なる価値をもっている。かくの如く二者を高く評価する見地からすると、表象たるキリスト教の神を概念するにアリストテレスの神たるイデーを以てした事が果して為されうることであつたか、と問われなければならぬ、といふのは、アリストテレスの神、質料から純粹なる形相であつて自己認識を事とする理論理性たる神は、創造を知らず創造をせざる神であるから。アリストテレスとトーマス・アクィナスとを連結するヨゼフス・グレットの主張にも、我々からすれば、やはり同一の困難が含まれている。

さしあたりては、問題をカントとヘーゲルとに局限して、右の困難の实体を論じよう。その实体は、此の二人においては、細部について見れば、勿論相互から異なる諸点があるが、しかし、二人が共にアウグスチンの意味での聖書のレリギオー(religio)と古代ギリシア人の愛知 *philosophia* との綜合又は混合の歴史の内にある事、に存する。この綜合は教父、就中、アウグスチンより後代の多くのヨーロッパ人にとりては極めて当然の事であつた。しかし彼等の中にすら、これを無理とする人があつた。我々から見れば、此の綜合は、これを了解するに甚だ困難である、といふのは此の二者の間には種々の大なる差異があるから、例、古代ギリシア人は多くの神々に祈つていたが、キリスト者達は唯一の神のみを仰ぐのであり、デーモノロギーは廃せられて、代りにエンゲロロギーが立てられたのである。

さて此の我々にとりての困難を解決するがために、これを原理論の見地から考察しよう、といふのはアウグスチンもトーマスもボナヴェントウーラもカントもヘーゲルも共に福音をギリシア哲学に結合しており、そしてそのギリシア哲学は、始元の学たる限において、原理論であるから。そしてこの二者の結合の仕方を究明するならば、其処には原理論そのものの大なる変革が見出される、そしてその変革の要点そのものは或は創造せられたる質料とも或は虚無からの創造とも

言表はされうる、勿論これと異なる言表はしを拒否するのではない。

三 質料は原理に非ず

カントとヘーゲルとは、既述の如く、既に聖書の神とギリシャ人の愛知とを結合したるヨーロッパ哲学の歴史を彼等の愛知活動の先行条件としているのである。従って問題は聖書の神とギリシア人の愛知とを、聖書の神の側から、結合することによりて成立したる哲学にかかつて来る、というのは、ギリシア人の愛知の側から聖書の神を愛知へ結合しようとした人々はいなかったから、けだしギリシア人の愛知の側に立つものは聖書の神を知りて否定したのである。此の哲学を成し立せしめたるは教会の父達と学校哲学者達とである。そしてそれは彼等による原理論の徹底したる変革によりてであった。如何にしてそれはなされたのであったか。

それは聖書の唯一の神を唯一の最高原理として確立することによりてであった。そしてその場合に彼等はギリシアの哲学者達の説きたる原理論を巧みに採用し利用しているのである。アウレリウス・アウグスチンは彼の八十三問集第四十六問によりて、プラトンの諸のイデアを聖書の神の知性 *Intellectus, intelligentia* の内へ取入れる。⁽⁶⁾ これはギリシア人の

作られたるには非ざる自然 *physis* から諸の形相(イデア)を奪ひて聖書の神のうちへ置き入れ、自然の内から超自然の内へ転位せしめたこととなる。彼は此の短いが重要な論文のうちでは質料 *materia* を論じていない。彼が之を論ずるのは告白録⁽⁷⁾ においてである。そこで彼は質料を「虚無に近きもの」*prope nihil* とし、聖書の神によりて「虚無から」(*ex nihilo*) 創造せられたとす。これが原理としての質料の明白なる否定なのである。彼は其処では質料のイデアを言はない。之を言うのはトーマス・アキナス⁽⁸⁾ である。

プラトン及びアリストテレスの原理論を善く知りて、それをキリスト教の哲学及び神学へ採用し利用したる第十三世紀の学校哲学者達のうちで、特に大なるはトーマスとボナヴェントゥーラとである。ここでは良く知られている前者には言及するにとどめ、後者を主要資料として此の問題の考究を進めよう。(ボナヴェントゥーラ *Bonaventura* は以下においてボナと略記せられる。)

ボナはアウグスチンの質料原理否定の思想を受け継ぎて、質料原理を明示的に断固として否定している。勿論、彼は原理ではあらぬ質料を否定するのではない。彼は彼の名著たる神学略説⁽⁹⁾ のうちにて次ぎの如くに言う。

神の三一性について、以上のことどもが既に摘要的に知られたる故、次ぎに宇宙という被造物について他のことども

が言はねなければならぬ。この被造物たる宇宙については次ぎのこともが摘要的に認識せらるべきである。此の宇宙という営造物のすべては存在(esse)の内へ引出されたのであった、時間の中で(ex tempore)、また虚無から(ex nihilo)、究極なる・単独なる・そして最高なる・一原理によりて。此の一原理の能力が、それは無量ではあるけれども、すべての物どもを一定の重量と数と尺度¹⁰⁾によりて処置した。

この箇所は質料に関するのみのもではなくて、全宇宙の創造について述べるもの、そしてその基本的なる事項を如何にも簡潔に要領よく論述している。今此処では、それらのうち、当面の問題にとりて必要なことどもを取出して用いることとする。

(1) 右の引用のうち次ぎの文が先づ注目せらるべきである。「此の宇宙という営造物の総べては存在の内へ引出されたのであった、時間の中で、また虚無から、究極なる・単独なる・そして最高なる・一原理によりて。」このうち「存在の内へ引出されたのであった、時間の中で、また虚無から」が、先づ、一般的に質料原理の否定を意味している。

(2) 「存在の内へ引出された」というのが「創造せられた」creataといふことである。此の文の主語は「宇宙といふ営造物のすべて」であるから、この文は質料原理を特にめ

ざして、之を直接に否定するのではないが、その事が含まれているのである、というのは、究極の・単独なる・そして最高なる・唯一の原理を、此の文は強く主張すると共に、他方において、その唯一の原理より以外の総べてのものを存在の内へ引入れられたる物、即ち被造物 creatura であるとするのであるから。従つて被造物の一つたる故、所謂質料原理 principium materiale は唯一にして最高なる原理と肩を比べるものではなく、況んやその上に立つものではない。故にボナはつづくパラグラフにおいて「原理の多数性を主張するマニの徒の誤謬を拒否する」と言ふのである。

(3) 「時間の内で」を説明して彼は言う。「時間の内でと言われることによりて、此の宇宙を永遠なりと主張する人々の誤謬が除去せられるのである」と。これは質料を含む此の宇宙が永遠なるものではなくて、時間的なもの、留ることなく遷りゆくものである事を意味する。被造物 creatura は時間的であるが、創造者 creator は永遠であり、そして此の永遠にして唯一なる創造者のみが原理なりと肯定せられるのである。この創造者は「有体であり、可変である物どもの、不完全なる質料 materia とはならぬ¹¹⁾」と彼は説く。

(4) つづいて彼は言う「虚無から」と。これを説明して彼は言う「虚無からと言われることによりて質料原理¹²⁾について永遠性を主張する人々の誤謬が除去せられるのである」

と。ギリシアの愛知者達は自然又は宇宙を分析して質料と形相とを永遠なるものとして樹立している。しかし聖書の立場からすれば、その宇宙は被造物である。故にその構成要素たる質料もまた被造物である。故に質料原理と呼ばれたるものを聖書の神と同等に永遠なるものとすることはできぬ。

以上の通りであるから、ギリシアの愛知者達が自然 *physis* の立場に立ちたるとは異なりて、聖書 *sacro-sancta Scriptura* の立場に立つボナ及び彼と立場を同じくする人々は、質料原理を、あらゆる意味にて否定するのである。しかし、それは質料を、創造せられたるものとしても、否定し去ることではなくて、質料が聖書の神と同等に永遠なる原理であることを否定するのである。

四 唯一なる究極の原理

以上によりて原理としての質料がボナによりて否定せられていることは明白となったであらう。この否定は之をアウグスチンもトーマス・アクィナスもがなしているのである。注釈第二卷¹⁴におけるボナは、トーマス・アクィナスと同様に、アリストテレスの原理論を聖書の神の為に用いているのである。そのアリストテレスの原理の数は、周知の如く、彼と共に充分に言へば、四箇であるが、それらを最後のものまでに

還元すれば、二箇、即ち質料と形相との二箇である。然るにその質料が原理であることは否定せられた。故に原理としては形相のみが残る。そしてそれが聖書の主張する所の創造者たる神である。故に此の神は諸形相であらねばならぬ。ボナは此のことを、あのアウグスチンの八十三問集の第四十六問によりて肯定¹⁵している。そして此の神は、既述の如く「単独にして最高なる・唯一なる・究極の原理」たるものとなされる。これによりてボナはギリシアの愛知者プラトン及びアリストテレスをも、原理の多数性を説く限りにおいては、マニの徒をと共に、その誤謬の故に斥けることとなる。そして此の唯一の原理は最完全なる原理である、ともなされている。

そして此の原理は諸形相 *ideae* であるから、この唯一・最高・最完全なる原理について次ぎの如くに言はれる。「(此の原理は) いづれの被造物との関係においても三種の原因の、即ち能作因、範型因及び目的因の意味を持って、いることが必然である¹⁸」と。この範型因は形相因と同一である、というのは、範型 *exemplar* は形相 *idea*¹⁹ と同一であるから。これは聖書の神たる形相原理が創造活動及び被造物の唯一の原理であると主張することである。ボナは言ふ「彼は最完全なる原理である故、必然的に彼は自己によりて・自己に従いて・そして自己の為に活動する、というのには彼は活動に際して自己より以外の何物をも必要としないから²⁰」と。即ち宇宙

の究極の原理は聖書の唯一の神のみなのである。「しかし斯くの如きは唯ひとり神のみなのである。」⁽²¹⁾これは聖書の神を唯一の原理とする考え方であるから、ギリシアの愛知者達の知らなかった所の、そして知りたる後には拒斥した所の原理の思想である。それ故、教会の父達による・之を原理とする愛知の樹立と学校哲学者達による此の愛知の展開とはヨーロッパ哲学史のうちへ全く新らしき愛知を導入し発展せしめたる事である。この事の容認によりて、ヨーロッパ哲学の了解を妨げる諸困難のうちの根本的なるものが除去せられる。カントのイデー論はアウグスチン、トーマス、ボナヴェントゥーラの聖書の神たるイデアの説を通じて了解せられうるものである。ヘーゲルのイデーの説は聖書の神を純粹形相たる理性と同一とするものである。

五 虚無からの質料の創造

如何にして、また如何なる意味にて質料を持つ宇宙が創造せられたのであるか。ボナは「虚無から何物かが創造せられる」*creatio ex nihilo aliquid* の信仰へ、⁽²²⁾次ぎの通りに論じて、人々を誘い入れようとする。

「虚無から何物かが創造せられると言われるときには、その意味は三様 *tripliciter* にとられうる。或は質料的 *ma-*

terialiter に、例、鉄から小刀が作られるが如くに、或は原因的 *causaliter* に、例、父から子が生まれるが如くに、或は順序的 *ordinaliter* に、朝から昼が成る (*ex mane et meridies*) が如くに。これらのうち初二の考え方よりすれば、無からは何物も生じない (*ex nihilo nihil*) が真である。しかし第三の考え方からすれば、虚無から何物かが生ずる (*ex nihilo aliquid*) は神 *Deus* の本性に従いて (*secundum naturam*) 真であるが、神の本性を超え離れては偽である。無限なる力 (*virtus infinita*) によりて、それは質料の支持を必要とせぬから、容易に何物かが虚無から、あたかも何物かからの如くに、引出される。若し然らずとすれば、第一(究極)の原理の力 *virtus* は無限ではなくて、質料の土台を必要とするであろう。故にただ彼の力にのみ、此の事が、必然的に帰著せしめられるのである、何か他の被造物のうちには之と類同する力は見出されぬけれども。これは第一原理の固有性である、万能なること *omnipotentia* そのことも、その固有性であるが如くに。」

この彼の文の意味はこれであろう。虚無から何物かが生ずる *ex nihilo aliquid fieri* ということは万能なる神によりてのみなされうること、これである。トーマス・アクィナスは之を「信仰の普遍的真理」⁽²³⁾ *veritas fidei Catholica*

であるとする。ボナは此のトーマスの言を肯定しこそすれ、否定はしない。

要するに、虚無から何物かが生ずる、虚無からの創造、は信仰の真理なのである。人間理性は之を容認するよりほかはないのである。この信仰を容認する考え方を容認するのでなければ、教会の父達や学校哲学者達や近世及び現代のキリスト哲学の人々の学説を十分に了解することはできないのである。

右の通りであるから、「虚無から」*ex nihilo* は「虚無の後に」*post nihilum* である。故に、その虚無の後に「何から」*ex quo* と問うて「けることは、*ex nihilo* の *ex* が *post* という第三の順序的 *ordinaliter* なる意味を有することを知らず、神の万能の信仰の容認を見落したる愚者の問であると
言はれることとなる。

六 質料と形相とデウス

この信仰の真理を証明するためにボナは邪説を挙げてい
る。

その第一はクセノプハネースを主唱者とするエレア学派の
説である。彼等は「如何にして何物かが虚無から作られるか
を知らなかったし、また元初にデウスのみがあったとする故、

そのデウスが自己自身から、換言すれば、自己を質料として
総べての物を作った」(取意)とする。——これに関してボ

ナは言う、デウスの真実在は全く不変化であり、最も崇高で
あるから、それが有体的にして可変なるものどもの不完全な
る質料となることは不可能である、というのは、質料は形相
によりて完成せらるるにあらざれば、本来的には不完全なる
ものであるから、と。しかし惟うに、聖書の神を深く信じて
おり、他方においてプラトンやアリストテレスの質料及び形
相の学説を用いて、その神を神学的に、また哲学的に取扱ふ
長き伝統のうちにおいて、之に忠実なるボナがエレア学派の主
張を見れば、それは斯くの如くに解釈せられ、このやうに批
判が加えられることとなるのである。ここには汎神論の問題⁽²⁵⁾
も含まれている。しかし、第三者たる我々から見れば、事態は
異なる。エレア学派のデウスとボナのデウスとは、そのデウ
スという表現は同一であるが、それによりて意味せらるるも
のは異なる、というのはエレア学派の人々は新約聖書のデウ
スについて論じているのではないから。しかのみならず、ま
た聖書のデウスより以外のデウスならば、そのデウスが質料
と成るとも考えられているのである。チュハーンドーギア⁽²⁶⁾、
マインドウーキヤ⁽²⁷⁾などのウパニシャド、これらや、その他の
ウパニシャドの要語の体系的集録たるブラフマ・スートラの⁽²⁸⁾
アートマン又はブラフマンがそれである。(如来知見たる仏

教の哲学は聖書の神を説くのもなく、またウパニシヤドの
アトマンを説くでもない。世界哲学史の現象としては哲
学又は愛知の多様性が認められなければならぬ。

謬説の第二はアナクサゴラスのである。

宇宙は、あらかじめ存在していた諸原理から、即ち質料と
形相とから作られたのである。しかし諸形相は質料のうち
かくれていた (*latebant*) が、後に理性 (*intellectus*) がそ
れらを (質料から) 區別したのであった。——これについて
ポナは言う、諸形相が同時に質料の内にかくれていることは
正しき理性 (*recta ratio*) が了解せぬことである。故に此の
アナクサゴラスの学説は後続する愛知者達によりて排斥せら
れた、と。——このポナのアナクサゴラス解釈はアリストテ
レスのそれに依るもの。従つて此の解釈はアナクサゴラスよ
りも、やや、後に樹立せられたる質料と形相との哲学説をア
ナクサゴラスの内え読入れすぎている。また理性 (*intellec-*
tus; ho nous) といふが、アナクサゴラスにおいてはそれは
deus ex machina たるにすぎない。——このポナの解釈及
び批判の奥底には彼自身の、諸のイデアである所の創造者た
る神、聖書の神、の信仰がある。この神が、その万能 *omni-*
potentia の故に、虚無の後に質料を作ったのである。その神
が、初めから、あらかじめ質料のうちにかくれていたとは、
彼によりては、考えられない。勿論、彼の此の信仰は唯だ此

のアナクサゴラス批判の場合に限りて言わるべきではなく
て、彼の言説のすべての根柢たるものである。

第三の謬説はプラトンの徒 (*Platonici*) のものである。彼
等によれば、宇宙はあらかじめ存在していた諸原理、即ち質
料と形相と、から作られたのである。そして質料はそれ自身
によりて (*per se*)、独立に存在しており、諸形相は質料から
分離して存在していた。そして後に時間の中で (*ex tempo-*
re)、最高の制作者 (*opifex*) によりて両者が結合せられた
のである。——これについてポナは言う。不完全なる質料が
永遠の昔からあったと言うことも、また諸形相が質料から分
離せられていて、それらが後に質料と結合せられたと言うこ
とも、ともに不合理と見える。また、三種の人間、自然的な
ると数学的なると神的なると、を定立することも不合理であ
る。故に此の説は後続の愛知者達によりて承認せられなかつ
た。——これはティマイオス篇の内に見られるプラトンの説
と、形而上学 (*ta meta ta physika*) の内でのアリストテレ
スのイデア論批判とを組み合はしたもの。ポナはプラトニー
キの学説のすべてを否定するのではないが、ここでは彼自身
の創造者たる神の説に合はぬ点を取出ししているのである。

第四の謬説はアリストテレス及びペリパテティキのもので
ある。アリストテレスは、デ・カイロの第一巻第十章などに
おいて「海が創造せられた」と言う。その限りでは彼の学説

は真理に近い。しかしデ・プランティスの第七章にては、宇宙は恒常に植物や動物で満ちていたと言う。故にアリストテレスは宇宙の被造物なるか非被造物なるかについて、定説を持つていなかったのである。更にまた、アリストテレスが、質料と形相とが虚無から作られたと、したか否かを、ボナ自身は知らぬが、しかし此処えまでアリストテレスの考えは到達していなかった事と思う、とボナは言う。故にアリストテレスも亦謬説を唱えている、但し他の愛知者達と比較すれば、彼は真理に近づいている、とボナは言う。——此のボナのアリストテレス批判は、一方において彼を不完全として退けるが、他方においては古代ギリシアの愛知達のうちでは聖書の啓示の真理に最も近しとて、彼に好意を示しているのである。このボナの批判は彼の時代の大勢を示しているが、しかし、その根柢たるものは「万能なる神の信仰」(credo in Deum patrem omnipotentem)である。

斯くの如くに、質料と形相と神(デウス)とを問題として、聖書の最高の真理から最も遠きものから、それに最も近きものに至る四箇の謬説を順次に挙げたる後に、その結語としてボナは言う、⁽²⁹⁾「愛知者達の知識が及ばぬ処、其処へ聖にして聖なる文書(sacro-sancta Scriptura)が来て、我々を助ける、そしてその聖書は言う、総べての存在は創造せられた、そして存在する者のすべてが存在(esse)のうちえ引出

された、と。そして理性(ratio)といえども、信仰(fides)と仲たがいしないのである」と。

この信仰は新約聖書の神、旧約聖書以来の創造する神、全能なる神、創造する三一性(trinitas creatrix)たる神への信である。この信をアウグスチン⁽³⁰⁾は巧みに言表はしている、「キリスト者にとりては、一にして、真なる創造者の善性(bonitas)を被造物の原因なりと信するのみにて充分なのである」と。

故に、之を原理論の見地から見れば、これは、古代ギリシア人の愛知との関係において、全く新らしき原理の導入であり、樹立である。この新原理たる創造する神又は三一性の神を信仰して原理とする人々は古代ギリシアの愛知者達の質料を被造物なりとして、それが一箇の・独立の原理である事を断固として否定する。また此の人々は古代ギリシア人の諸形相を、それらが超宇宙的諸形相たる限りにおいては、創造する神であるとし、それらが宇宙内の諸形相である限りにては被造物なりとする。斯くの如きはヨーロッパ哲学の歴史の内にて起りたる、最も注目せらるべき原理論の変革である。これを看過すれば、ヨーロッパ哲学の内に何物か不可解なる謎があることと成るのである。例。何故にヘーゲル哲学に満足せざるフォイエルバッハは質料主義(所謂唯物論)を唱道したのか。第十八世紀末から第十九世紀初にかけてのヘーゲル

哲学は、抗議派キリスト教の立場からではあるが、聖書の神と諸形相とを不可分離に結合している。その諸形相をすべて
の限定としてもつ所の唯一の絶対形相⁽³¹⁾ (die absolute Idee) が彼の神である。そして彼の愛知は、此の形相の学であるから、神学である。フォイエエルバッハは之に承服せず、愛知は人間学であらねばならぬとする。そして古代からの形相主義と質料主義との闘争の連続として、当然に、ヘーゲルの形相主義に対して質料主義を成立せしめたのであった。

七 Ex nihilo の迷路

さきにボナがクセノフハネスを批判するのを述べたときに、事は汎神論にも関係を持つと言っておいた。クセノフハネスの学説は久しく汎神論と言われて来たが、近来は彼を汎神論から救う解釈⁽³²⁾も行われるに至った。

此の汎神論ということから考へるとき、ボナは論じていないが、彼より幾分早く活動したであろう所の David de Dinando⁽³³⁾ は質料の汎神論者として著名である。トーマス・アクィナス⁽³³⁾ は彼を真正面から手厳びしく批難している。このトーマスは彼の神を諸形相の形相とする人である。それ故に必然的に形相の汎神論とも言われるべき学説が探索せられるのであるが、ユーベルウエヒ・ガイエルの中世哲学史⁽³⁴⁾は、之を唱

えたのはアモリ・ドゥ・ベーム (Amaury de Bène, Amalrich von Bène) であるとす。

このキリスト教会からは好まれぬ二人の思想の源はヨハネス・スコトウス・エリゲナである。ヨハネス・エリゲナも汎神論者として批難せられるが、弁護の説を述べる人もある。

今此処での問題から、関心が持たれるのは、このヨハネスが神 Deus を虚無 nihil とし、creatio ex nihilo の ex nihilo を神から ex Deo としていることである。彼は次の通りに言う⁽³⁵⁾。

神的事在 (divinae naturae) の明瞭性はすべての理性、それが人間なのであれ、天使達なのであれ、によりて言表わされえず、近づかれえず、また認識せられない、というのはそれは超存在性的であり、超自然的であるから、——この神的事在の明瞭性が、かの名称によりて意味せられていと私は惟う。

かの名称とは虚無 nihil という名称である。故に、これは聖書の神を、アレオパギタのディオニシオスの感化の下に、ex nihilo の nihil とするもの。故に当然に彼は、一往は、汎神論者と言われることとなる。というのは虚無からの創造というのは「彼が諸原理を通じて進出して見られうる所の又は見られぬ所の諸被造物となること⁽³⁶⁾」であり、また神たる事実 (divina natura) の単純性の故に、「それ故に神と被造

物とを相互からへだたる二つのものなりとではなくて、同一なるものと了解すべきである」から。というのは

彼自身(神)ではあらず、それにおいて自己自身を作る所の、自己とは異なる質料を彼は必要としない。然らずとすれば、彼は無能力なりと見られ、また若し彼の顕示と完成との助力を彼が他から受けたとすれば、彼は彼自身において不完全なりと見られる。⁽³⁸⁾

からである。即ち諸の被造物の各が「神現」(theophania)なのである。

このヨハネス・エリゲナの思惟方法は聖ディオニシオスを介して新プラトン学派の人々、殊にプロクロスにつらなり、此の人々を介して更に諸のウパニシヤドにつらなり、また他方においては、時代的に下りて、ドイツ神秘説の「無」(nichts)と関係を持つ。

カッバラの研究者ゲルシヨム・シヨレム⁽⁴⁰⁾はカッバラの人々が「虚無」の解釈に苦しんでいる事を述べている。

これらの与件によりて考えるとき、「虚無から」の「虚無」又は「無」は正に迷路である。これを聖書の神の立場から、しかもギリシア哲学の術語を用いて、神学的に又は哲学的に解釈するに当りて、多くの邪説や異説が出た。汎神論の或者は此処から生じたのであった。万能なる父なる神の信仰の純粹性のみが此の迷路を出づる導きの糸となっているのである。

る。しかし、それは超自然の光に照されている者にとりてのことであった、そして自然の光のうちに止まる者には、それは大なる奇蹟、むしろ不可思議である。ここにおいて、各々の大なる思想や哲学の根柢をなすものは、それぞれのミステリオンたる、根本体験である事が認められなければならぬであろう。

八 結 語

一 以上によりて「虚無からの創造」ということがカトリック神学及び哲学の正統説によりては如何に解釈せられているかを考察した。それは遂には「全能なる父なる神を我信ず」というキリスト教の信仰告白 symbolum の第一ヶ条へ帰着するのである。

二 之に合せて、当然に、異説又は邪説にも言及せられた。

三 虚無からの創造又は虚無或は無が以上によりて明瞭とならしめられたとすれば、此の無や虚無からの創造を、洲云無の無に由来する無と結合することはできない。況んや、道元禅師は正法眼蔵によりて虚無からの創造を説きつづけた、という主張は成立しない、というのは所謂無の思想は正法眼蔵のうちにはあらぬからである。

四 元来、虚無からの創造というのは、旧約聖書に依るユダヤ教の思想であり、之を新約聖書に依るキリスト教が継承し、キリスト教の荷負者達がギリシア哲学を用いて何とか明白ならしめんとしたものである。しかし遂には信仰え立帰らざるをえないものである。

五 *nihil* も無も共に多義にして曖昧である。そしてこれらが言われる処は空気が稀薄である。しかし、それらは良く分析せられて、混合は何処までも回避せられ、各々の無又は虚無又は虚無からの創造の真義が取出さるべきである。

六 之をヨーロッパ哲学の問題として見れば、それは原理の变革という事に帰着する。古代ギリシアの有力なる哲学者、プラトンやアリストテレスも、またデーモクリトスやエピクロスも、無からは無としか考えていないのであるから。

七 世界思想史的量の思想の根柢たるものがそれぞれのミステリオンとも言われるべき根本体験であることは承認せられなければならぬであろう。しかしそのミステリオンが常に最初から哲学と結合していたか否かは各の場合について考察せらるべく、また哲学と言われるもの、そのもの、の意味限定も成さるべきである。

出典及び注

- 1 Kant, *Imm.: Kritik der reinen Vernunft*, B. S. 370.
- 2 Kant, *Imm.: Kritik der Urteilskraft*, §83, S. 396; §87,

S. 422, Anmerkung.

3 Hegel, G. W. Fr.: *Encyclopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse*, 3. Aufl. §§ 18, 384, 574-577. 20 § 577 2076 アリストテレスの形而上学からの引用。

4 川田熊太郎著『哲学要論』一三三—一三八頁。

5 Gredt, Iosephus, O. S. B.: *Elementa philosophiae Aristotelico-Thomisticae*, Volumen I, § 3. Editio nona recognita. Editorial Herder 1951.

6 この詳論は、川田熊太郎著『哲学要論』二一七—二五二頁、第四章「補説第二」「二種のイデア論」のうちに見出される。

7 Augustinus, A.: *Confessiones*, XII, viii (ed. by Montgomery, p. 371).

8 Thomas Aquinas: *STh. I. Q. 15. Ar. 3. Cfr. De Veritate*, Q. 3. Ar. 5.

9 Bonaventura: *Breviloquium*, Pars II, Caput 1, § 1.

10 Cfr. *Sapientia*, 11. 21.

11 Bonaventura: *Comm. II. (Opp. II. p. 16 b. Ed minor, p. 10 b.)*

12 Cfr. Thomas Aquinas: *SCG. II, 15; I. 20.*

13 Thomas Aquinas: *STh. I. Q. 15, Ar. 3, Ad tertium. Cfr. SCG. II, 16; 21-22.*

14 Bonaventura: *Commentaria In Quatuor Libros Sententiarum Magistri Petri Lombardi, Tomus II, In Secundum Librum Sententiarum. Quaracchi MDCCCLXXXV.*

- 15 Do. 17 b.
- 16 Unum principium primum, solum et summum.
- 17 Breviloquium, Pars II, Caput 1, § 4.
- 18 Ibidem.
- 19 Op. cit., Pars I, Caput 8.
- 20 Op. cit., Pars II, Caput 1, § 4.
- 21 Tale autem est solus Deus (Comm. II, Dist. I, Pars I. Art. II. Quaest. II). Cfr. Commentaria, ed. minor, volumen II, p. 21 b.
- 21^a Cfr. Augustin, A.: DCD, II. VIII, IX, X.
- 22 Bonaventura: Opp. II, pp. 13-18. Cfr. do., ed. minor, vol. II, p. 12 a.
- 23 Thomas Aquinas: SCG., I, 17.
- 24 Bonaventura: Opp. II, p. 16 b.
- 25 川田熊太郎著『仏教と哲学』一三三—一三八頁。
- 26 Chāndogya-upaniṣad, III. 12. 6.
- 27 Māṇḍūkya-upaniṣad, 1 et 2.
- 28 Bādarāyaṇa: Brahma-sūtra, I. 4. 23-28.
- 29 Bonaventura: Opp. II, p. 17 a.
- 30 Augustin, A.: Opuscula (Descrée), vol. 9, p. 116 (Enchiridion, III, 9). Cfr. DCD, XI, c. xxii.
- 31 Hegel, G. W. Fr.: Wissenschaft der Logik, 3. Buch, 3. Abschnitt, 3. Kapitel (Philos. Bibl. Bd. 57, S. 484). Cfr. Thomae Aquinatis De Veritate, Q. 2. Ar. 7: omnimoda unias.
- 32 Jaeger, Werner: Die Theologie der frühen griechischen Denker, SS. 62-65. W. Kohlhammer Verlag. Stuttgart 1953.
- 33 Thomas Aquinas: Summa Contra Gentiles, I. c. 17.
- 34 Friedrich Ueberweg: Grundriss der Geschichte der Philosophie, Band II, Bernhard Geyer, Die patristische und scholastische Philosophie, SS. 250, 251. Schwabe & Co. Verlag. Basel/ Stuttgart 1927.
- 35 Johannes Scotus Erigena: De Divisione Naturae, III, 19. (Migne, PL. CXXI, 680 D. Cfr. idem opus, Oxonii, E Theatro Sheldoniano, Anno MDCXXXI, p. 127. (Miverna GMBH. Frankfurt am Main, unveränderter Nachdruck. 1964.)
- 36 Op. cit. (Migne, DDN., III, 25; 692 c. Oxonii, p. 133.)
- 37 Cfr. supra no. 26, 27 et 28.
- 38 De Divisione Naturae. (Migne, PL. CXXI, 678 D—679 A. Oxonii, III, 17, p. 126.)
- 39 Ibidem (Epiphaneia, 斥異『及心持区画中心及心』)
- 40 Gerschom G. Scholem: Major trends in Jewish mysticism. 2nd edition 1946. p. 16.